

国際サーカス村通信	VOL.19 N001	2014年 9月 16日 (火)
		文責 西田 敬一
編集 NPO 法人国際サーカス村協会	〒376-0303 群馬県みどり市東町座間 41-1	
Tel0277-70-5010 Fax0277-97-3688	http://www.circus-mura.net	k-nishida@accircus.com

●サーカス学校開校13年目

9月16日(火)、サーカス学校13年目の授業が始まります。在校生は7名と人数は増えていないが、なんとか続けていきたい。

今年も関東短期大学の学園祭”アザリア祭”から出演依頼をいただいた。今年は、昨年暮れの発表会で公演した”サーカスはリヤカーに乗って・港の街篇”を上演する予定。この作品は、卒業生のケン太(田中健太)の作・演出。”サーカスはリヤカーに乗って”の巡業の途中、彼が発表会に合わせて作った作品だ。卒業生のサクノキこと鶴貞浩と、キヨノカこと柏木清香も参加している。

10月26日(日)13時から、関東短期大学(〒374-8555 群馬県館林市大谷町625番地)の体育館で行うので、お時間のある方はぜひお越しください。

●会費納入のお願い

10月より新年度となります。つきましては、同封の郵便振替用紙にて会費の納入をお願いいたします。

年会費： 5,000円

郵便口座：00180-8-106528 加入者名：国際サーカス村協会

●”サーカスはリヤカーに乗って” 中間報告2

6月21日(土)長野県上伊那郡飯島町にある風の谷絵本館という喫茶店兼絵本展示のギャラリーで、イナダニヤンという3名のミュージシャンとケン太、アリサ(卒業生・目黒有沙)がコラボレーションしてショーを行った。翌日は西田とケン太が、原水禁の平和行進デモに参加した後、サーカス村ワークショップのため、サーカス村に帰村。ワークショップは当初、昨年同様、岐阜県恵那市で行う予定だったが、リヤカーの旅の日程が立て込んだこともあり、急遽サーカス村で行うことになり、参加者にご迷惑をかけたしまった。申し訳ありませんでした。

ワークショップの後は、7月5,6日、富士見市市民文化会館「キラリ☆ふじみ」での”サーカスバザール”の公演などがあったため、リヤカー巡業はしばらくお休みした。“サーカスバザール”公演は、今年で3回目。3年目にして、観客数が大幅に増えたとのことであった。サーカス村・サーカス学校として、この公演には特に熱を入れて制作しているので、感無量というか、心の底がジーンとした。

劇場で行っているサーカスショーはほかの劇場でも公演できればという想いで作っているのですが、その可能性が見えてくるのはなんとも嬉しい。但し、それなりのサーカスショーを作るためには、たとえば今回のクロワッサンサーカスの清水恒男氏の綱渡りなどの大技が欠かせないし、そのためには、そうした大技ができるセットが必要で、それをほかの劇場で可能かどうかという問題が常に出てくる。そのあたりのノウハウをぼくらはまだ持ち合わせていないので、研究していかなければならない。

ところで、下記リヤカー巡業の次は、別紙チラシにある関西よつ葉連絡会による「川内原発再稼働反対!! キャラバン」行動に参加する。みなさんもぜひご参加を！

- 7月31日(木) 「アグロス胡麻郷」(京都府南丹市) 入り (こちらにほぼ8月20日まで逗留)
- 8月1日(金) 「東北からの子供たちのためのワークショップ」(能勢農場/大阪府豊能郡)
- 8月2日(土) 能勢農場夏まつりにて大道芸(大阪府豊能郡)
- 8月3日(日) 蔵の辻・壱の市(福井県越前市)
- 8月6日(水) 特別養護施設「萩の里」(京都府南丹市)
- 8月7日(木) 能勢農場にてワークショップ(大阪府豊能郡)
- 8月8日(金) 福井県庁前抗議行動・デモ参加
- 8月9日(土) 福井市・再稼働反対集会参加(福井県)
- 8月12日(火) 釜ヶ崎夏まつり前夜祭(大阪府大阪市)
- 8月13日(水) 釜ヶ崎夏まつり初日(大阪府大阪市)
- 8月14日(木) 南丹交流の家(京都府南丹市)にて大道芸
- 8月18日(月) 日本フィンランド林間学校(三重県大津市)夏まつりにて大道芸
- 8月20日(水) 県立小児医療センター(滋賀県守山市)にて大道芸
- 8月21日(木) サークス村戻り

なお、9月後半、能勢農場(大阪府豊能郡)の反原発キャラバンに参加したいが未定。

- 10月3,4日(金土) 京本千恵美ソロ舞台公演「ここはどっちへ？」
ネオンホール(長野県長野市)にて(チラシご参照)

*

リヤカーは西へ行くにしたがって、大道芸・ショーを行えるチャンスが少ないうえに宿泊場所の確保が難しいので、どうしても出費が多くなる。この問題をなんとか解決しないと、今後リヤカー巡業が厳しくなることを痛感している。反原発行動と自分たちの表現活動をいかに連動させるかという考えでリヤカーの旅を続けているので、なんとか来年には沖縄まで辿り着きたい。計画をしっかりと練り直さなければいけない。(西田敬一)



↑能勢農場の林間学校ワークショップの様子。ディアポロやシガーボックスを体験する子どもたち。



↑富士見市民文化会館「キラリ☆ふじみ」(埼玉県)に登場したリヤカー
←「蔵の辻・壱の市」(福井県越前市)で大道芸を行うケン太



●リヤカーの歌〔田中健太〕

リヤカーからは歌が聞こえてくる。見方によってはグロテスクな、見方によっては牧歌的な絵が描かれた車体。それを引く人間の呼吸と、回転する車輪の音に混ざって、薄く開いた天板のトビラから、いつでも歌が聞こえてくる。

「アイヌ・プリ・チャランケ」！！

「キジムナーガ・チョンチョン」！！

「その戦争をやめさせろ！その戦争を」！！

リヤカーから流れる音は小さい。きっと、世界中のあちこちで存在を否定され、それでも日々の営みを捨てない人々の元に、その歌は届かないだろう。

それでも僕たちはリヤカーを引くとき、歌を流さずにいられない。

そもそも自分で作った歌でもないのに、他人の表現によりかかる僕は「偽善者」だろうか？それとも、どこかの大臣の言葉に従うのなら僕もテロリストなのだろうか？

ま、何を言われても「いいんだぜ」、「うたは自由を目指す！」のだから。

ある「DEMO」の現場で制服を着た人たちに“デモの種類が変わる”と言われてしまって、リヤカーから歌を流せなくなってしまった。

「何を警戒してるのBaby、おかしいよそんな心配」と言ったのだけれど、制服の人は「杓子定規」な言葉をくり返すばかりだった。

仕方がないので旅の仲間にバッテリー内蔵スピーカーを担いで歩いてもらった。同じ経験をした人にはわかるだろうが、バッテリーが付いたスピーカーは重い。70年という年月を重ね、体もそれなりに痛んでいる仲間だが、最後まで歩き通した。まったく頭が下がる。本当に「フォーエバー・ヤング」で、まるで「不死身のポンコツ車」な人だ。

それにしても、彼のことを心配してくれたのはデモに参加していた人たちばかりで、自分達の都合でスピーカーを担がせた制服の人たちは声も掛けようとしなかった。まるで「奇妙な世界」の住人のようだ。

奇妙な世界といえ、こんなこともあった。ある電力会社の前での集会に参加したとき、リヤカーを引いてやってきた我々を見て、参加者の一人が“政治団体じゃないですよ？”……政治団体の人間は「核などいらねー」って言っちゃいけないの？

最近あちこちで聞く“私は左翼じゃありませんから”とか“僕自身は右でも左でもない”という言葉には一体どんなメリットがあるのだろう。「ああわからない」右とか左とか言っている「その間に、目的を持った奴らが着々と準備をしてる」だけだと思っただけけれど。

わからないといえ、一番わからないのはどうして会う人、会う人みんなが信じられないほどに親切なのだろう。と、いうことだ。たった一、二度話ただけなのに、家に何日も泊めてくれたり、おいしい食事をごちそうしたりしてくれる。ありがとう。そんなことしか言えないけれど、「オイラそれしか言えない、他の言葉知らない」そんな気持ちでいっぱいだ。

リヤカーはこれからも「風に吹かれて」、「遥かな岡を渡っていく」、「この素晴らしき世界」を旅していく。「車道の真ん中」は行けないけれど、世界のあちらこちらにある「あの線を消しに」行くのだと思う。

「旅の途中でフラついたりしても」、「牛乳が飲みてェ」と眩き、「原発が54基」ある「この寂れた国」を旅し、「どっかの街で」、「機材が降ろされ」、「今夜のショー」が開かれ、「光をつかまえて、ガラクタの

魂を鳴らす」。次は「田舎へ行こう」。

そして、世界のあちらこちらにある「太陽のあたる場所」と、「この夜に輝いてるあの娘の窓を夢見て」、「夜の闇に吠えて」、「嵐からの隠れ家」に身をよせて旅は続いていく。

おこがましいのだけれど、言ってしまう。

「みんなの願いならこの胸にある」

そして、最後にこの歌を。

「OH！くたばっちゃう前に、旅に出よう。もしかしたら、君にも会えるね。JUMP！！夜が落ちてくるその前に、JUMP！！もう一度、高く JUMP するよ！！」

●台湾2泊3日のサーカスツアー〔大島幹雄〕

ルスツリゾートと姫路セントラルパーク、そしてリトルワールドで公演したウズベキスタンのサーカスグループ「アリエーヴァグループ」のメンバーから、「これから台湾に行く、日本と近いからぜひ遊びに来い」というメールをもらったのが、去年9月、台湾という言葉にちょっとそそられ、「必ず行くから」なんていう返事を出してしまった。台湾は、一度も行っていないところだし、飯も美味そう、家人を誘うと珍しく全員が行ってもいいという。行く気は満々だったのだが、家族全員が行ける日を設定するのはなかなか難しく、そのうちに時間は経ち、一番乗り気だった下の娘の就職も決まり、あまり自由がきかなくなったこともあり、家族で行く話はそのまま立ち消えになった。

忙しさにかまけて、そのままにしていたら今年の7月「今月から台北の近くのリゾート地での公演が始まる。とてもいいところなので来ないか、ここの公演が終わる9月にはウズベキスタンに帰る」というメールが届いた。このときは忙しかったので返事をだせないでいたら、今度は「来るといいながら、来ないのは俺たちのことを忘れたからだろう」という半ば脅迫めいたメールが届く。行きたいところでもあったので、この際この脅迫に乗ろうかと決断したのが、出発の10日前のことだった。

8月23日午後6時台北空港到着。入国手続も簡単、荷物もすぐ出てきた。ここであらためて台湾がとても近いところであることを認識する。空港では、アリエーヴァグループのリーダーのナージャが待っていた。彼女は70ちかくになっているはず、7年ぶりに会うわけだが、ずいぶん年取ったんじゃないかと心配したが、あんまり変わっていなかった。真っ先にナージャが「まったく変わっていないね」と語りかけ、そしてよく来てくれたと抱き締められる。

用意してくれた車に乗って台北市内へ。途中ナージャたちのグループを招聘している会社の社長さんと会食。期待していた台湾料理ではなくイタリアンレストランでの会食となった。ナージャたちが信頼を置いているこの会社の社長さん、なかなかの紳士で、しかも8年ほど日本にいたというので、日本語もぺらぺら、いろいろ楽しい話をする事ができた。

食事中何度もナージャの携帯に電話が入る。旦那のマラートと息子のアンバールからで、彼らも私との再会を、というか飲むのを待っているようだ。ここから1時間ぐらいドライブをして、いま彼らが仕事をしている万里ビーチに到着。沖縄のリゾート地のようなところだった。取ってもらったホテルの部屋も広く、また眺めがいいのでびっくり。さきほど会った社長さんが用意してくれたものである。ナージャたちのお客さんということで気をつかってくれたようだ。

荷物を置いて、ナージャたちの部屋へ、そしてマラートとアンバールと再会。みんな変わっていない、元気そう。これからいよいよ宴会の始まり、7年間会っていないその空白を埋めるために、この間起こったことをひとつひとつ拾い上げて話をするのだから、ウォッカがいくらあっても足りない。楽しい話もあったし、辛い話もあった。7年間の時間の重さを改めて思う。でもこうして酒を飲みながら思い出話ができるということが、なによりも嬉しい。



← (左) コロンビアサーカスのメンバーと
(右) ナージャとマラート夫妻 (ジギドのリーダー) と



←万里ビーチのサーカステント

彼らが出演しているサーカスは、このリゾート地に建てられたテントでやっていた。翌日 10 時からと 13 時半からと 2 回ショーを見る。

まずこの海辺に建てられたテント、昨夜見たときは、幻想的でさえあったのだが、明るい陽差しのもとで見ると、結構痛みが目につく。中国製の中古らしい。中に入ると、客席は 1,000 人ぐらい入るようで、冷房もしっかりついている。暑い台湾での夏のサーカスを、冷房なしで見せるというのはありえないだろう。ただ中に入るとかなりムツとする。かなりのお客さんが詰めかけているせいなのだが、アンバールたちの話では、とにかく上の方は暑くてしかたがないという。人が入ればいくら冷房が入ってもないと同じだという。テントには細い管がはわされ、そこからミストがでていたが、これはなかなかいいアイデアである。テント会場前には次々にバスがやってきて、たくさんのお客さんを運んでくる。ナー ज्याの話だとこの一週間、連日満員だという。平日は 2 回、土日は 3 回、休演日は月曜とのことだった。客層を見ると、シルバー世代がほとんどであった。昨日社長さんが、この公演のターゲットは、台湾でも増え始めている年金生活者だと言っていたことを思い出す。

10 時のショーがなかなか始まらない、なにか舞台裏でトラブルが起こっているようだ。一緒に見ていたナー ज्याが、MC の女の子がいないという。ショーは 10 分遅れで始まったが、MC がいないということで、進行がかなりぐちゃぐちゃになっている。構成はコロンビア人のグループ 12 名による、ハイワイヤー、デスホイール、オートバイショーとクラウン、アリエーヴァグループによる、パーチ、アラブダンス、カウボーイショーとウズベキスタンからやってきたジギドのショー、それをオーストラリアから来た 8 人のダンサーがつないでいくというもの、休憩なしで 1 時間半の内容だ。一回目は MC がいないということで、構成がめちゃめちゃで、ショーとしては正直いって見られたものではなかった。MC が入った 2 回目のショーは、なかなか見応えがあった。なによりも迫力があったのはオープニングで演じられたコロンビア人によるハイワイヤー。同じようにハイワイヤーの番組をもっているナー ज्याもこのハイワイヤーのすごさには舌をまいていた。すべての演技が命綱なしで演じられていることが信じられないという、自分たちではとてもできないし、安全性ということから命綱なしでの演技は禁じられているのに、この人たちはそれを平気でやっているのがすごいというのだ。圧巻は最後のピラミッド渡り、3 段重ねで 6 人のメンバーが一步一步声を掛け合いながら、わたっていく姿には圧倒された。気になったのは、演技中もつね

にリーダーらしき人が、綱の張り具合をチェックしていたこと。あとでアンバーに聞いてみると、アンカーは直接道路を掘って設置されているのだが、この暑さでアスファルトの状態が不安定なので、いつもチェックをしているとのことだった。しかしこのコロンビアチーム、大技3つの番組を持っているのだから、なかなかお得なグループと言えるかもしれない。あとでみんなと写真をとるときに、この中のふたりは、リトルワールドでやった「チルコラティノ」に参加していたという。やはりサーカスの世界は狭い。

アリエーヴァのグループのパーチは相変わらずスリリングで迫力がある、そしてこのグループの華ともいえる女性陣の美しさが色を添えているのだが、いまのメンバーは以前日本にきたときのメンバーと比べて、さらに優美さを増したように感じた。まもなく65才になるマラートの鞭さばきもあざやか、カウボーイショーは馬鹿受けしていた。

最後を締めるのはジギド。ここで使われている馬は、台湾で調達されたものでレンタルで、およそ一ヶ月調教してジギドができるようになったという。ただ最近一番いい馬を、レンタルしていたところがとりあげてしまい、半分ぐらいしか芸を見せられなかったのが残念とリーダーがぼやいていた。確かに5分ぐらいのショーで、えっこれで終わりなのという感じはした。

MCがいなかったというのも、アンバーの話では主催元とギャラのことでもめてのこと、さらにはこの馬もレンタル元と興行主のほうでなにかトラブルがあったからではないかという。どうも昨日あった会社の社長さんと共同で興行している主催者がかなりシビアーになっているということだ。というのも7月末の稼ぎ時に台湾を襲来した台風のため、1週間興行ができなかったからだ。ナー ज्याの話によると、とにかくいままで経験したことがないような強い雨と風で、怖くてしかたがなかったという。食糧を買い溜めて、1週間一步も外に出なかったという。このところお客さんも連日のように押しかけてきているが、台風が去ってから1週間ほどは客もまばらだったという。興行元からすれば大きな痛手だったろうし、経費を切り詰めたくなったというのもよく理解できる。ただこうした話はいくまでもナー ज्याたちの憶測である。誰か台湾側にロシア語ができる人間がいるのかと聞いたら、誰もおらず交渉などはすべて英語でやっているという。もっぱらアンバーが英語でやりとりしていると言っていたが、彼の英語もたいしたもんじゃない、きっとネットの翻訳機能などをつかってやっているのだろう。ジギドの人たちは6月に来島したと言っていたが、「いつまでやるの？」と聞いたら、一年という契約のはずだけど、ここの公演のあとどうなるかはさっぱりわからない、まあ成り行きにまかせると、呑気なものである。こうしたおおらかさがないと、言葉もまったくわからないところで、公演などできないかもしれない。

翌日の朝、みんなとお別れして帰国の途に着いた。あっという間の2日間だった。サーカス見て、ウズベグの手料理を肴にウォッカ飲んで、思い出話やみんなの消息話をしただけの2日間。イメージしていた台湾をちょっとしかというか、まったく味わうことができなかった。でもこういう旅も悪くない。

●サーカス・オズ再び（オーストラリア）〔大野洋子〕

2013年8月に、オーストラリアのパスにサーカス・オズを観に行っただけなのですが、約1年後の2014年9月3日～6日という強行軍で、新作を観に行ってきました。

今回は、ジーロングというメルボルンから車で約1時間ぐらいのところにある小さな町での公演で、ジーロング市の買い公演。町のパフォーミング・アーツ・センター（約800席）での公演でした。

初演は今年の6月でしたが、やりながら内容の変更はいろいろ出ているようです。いつも2年スパンで作品を変えており、この新作は、2016年3月までということになります。

前作は、工事現場を模したような作品でしたが、今回は「But Wait...There's More!」というタイトルで、「ちょっと待って…もっとあるから」という、広告などでよく使われる決まり文句です。「こんなに素晴らしいものが、なんと9.99ドルです!」というような歌があったり、衣装がバーコードだったり、広告宣伝のお約束がジョークになり、ヴォードビルのような雰囲気の中で進行します。

前の作品より演劇的な要素があり、進行役の歌手やクラウンが、かなりしゃべります。中には、オーストラリア人にしか分からないジョークもあったり、歌手の女性がアボリジニ出身ということもあり、アボリジニ訛り(?)の英語でわざとしゃべったりするので、観客の大笑いについていけないことも。

それはさておいても、内容はとても楽しく、洗練されていない(褒め言葉です)、どこにも干渉や影響をされていないオーストラリアらしいところが、私はとても気に入っています。



前作のサーカス・アーティスト10名の内、8名が入れ替わり、その8名の内2名は、過去の作品に出演したことがあり、6名は初のオズ出演ということになります。その殆どが、NICA(メルボルンにある国立のサーカス学校)出身です。アーティストの内1名がギター演奏もしますが、ミュージシャンは前回と同様2名で構成されています。

サーカス芸は、フラフープ、デュオの一輪車、BMX、フライング・トラップーズ、固定のシングル空中ブランコ、ジャグリング、ハンドアクロバット、チャイニーズポールなど。恐らくこれらも、やりながら変更されていくのだと思います。初演であったものが、すでに今回なかったり、新たなものがあつたりしたようです。中でも群を抜いていたのが、ボール・ジャグリングの女性です。前半彼女は、おとぼけキャラで、クラウンの役所を演じているのですが、これがまたユニークです。何もできない、何をやってもうまくいかない役所なのですが、本来こういう性格なのかと思うほど、そのおとぼけぶりには磨きがかかっていました。そして後半、ボールのジャグリングで見事に化けるのですが、ボールのマニピュレーションの技術を見せるというよりは、ボールと自身の身体とをうまく使った振り付けになっており、とてもうまく構成された作品で圧巻でした。聞くとところによると、物語を作って作品を構成しているそうで、それにあたっては、振付家やスタイリストなどを自分で雇い、作品を作ったということです。高度な技術を持ったうえで作品作りということ、感じさせる作品でした。

後半、オレンジの耳がついたかぶりものを、メンバーがつけてでてくるシーンでは、私たちは「コアラ」だと思い込んでいましたが、実はクラウンだということでした(!)。背景にも顔を模したものが2つあり、あの顔はなに?と聞いたら、やはりクラウンだということでした。

サーカス・オズは、メルボルンの市内にある郵便局の跡地を本拠地にしていましたが、今年の2月、新し

いビルに移りました。技術系の専門学校だった場所のようで、その改装費は数十億円！すべて国が出してくれたそうです。しかも家賃は破格に安いし、リハーサル室は2つあるし、敷地内には購入したばかりのシュピーゲルテントまでありました。リハーサル室が2つあることで、ひとつは外部のフリーのアーティストに貸し出すこともできます。

シュピーゲルテントは1920年創立の伝統あるサーカステント式のショー舞台ですが、最初にベルギーから購入した伝統サーカステントから買い取ったということでした。このシュピーゲルテントでも、ショーが行われます。私は残念ながら見ていませんが、Cirque 0をプロデュースした Ueli Hirzel が“アラジン・パレス”というショーで成功したのも、このシュピーゲルテントだったのではなかったかと思っておこしていました。

サーカス・オズを日本に呼べたらと思いながら、格安の Jet Star に乗り込み、飛行機小さいけど大丈夫だよと、ここのところの飛行機事故を思い出し不安になり、10\$支払って、映画を見まくって帰国しました。

←シュピーゲルテント ↓リハーサル室



● “スラバのスノーショー” を観て〔大須賀哉子〕

8月、北千住のシアター1010で「スラバのスノーショー」を観てきました。

ロシア出身のクラウン Slava Polunin が1993年に創作した作品で、これまで30カ国以上で上演、たいへん評価の高い作品と聞いていました。これまでも何度か日本公演が検討されたそうですが、劇場の問題、予算の問題で見送られてしまった経緯もあるようです。

これまでシルク・ドゥ・ソレイユの「アレグリア」でスノーショーの一部を見ることが出来ましたが、いよいよ全貌が見られるということで、楽しみにしていました。

劇場に入ると客席の照明が落とされて薄暗く、通路には早速紙吹雪があちこちに散らばっており、すでに演出された空間となっていました。会場はほぼ満席で、子どもも多くおりました。

序盤は、箒や電話などの小道具をつかったコミカルなクラウン芸や、ブラックライトで幻想的なシーンを作ったり、人形振りでパントマイムを見せたりと、様々な場面を見せてくれます。ひとつひとつはオーソドックスなことをやっているのですが、それが丁寧に演じられ、照明や小道具の細部にも気を使って、全体的に詩的で抒情的な雰囲気醸し出していました。特に青を基調とした照明がきれいで、ステージを品良くしているように感じました。その中で、子どもたちのクスクス笑いが聞こえてきて、ほんわか

優しい気持ちになります。

中盤、箒で取り払おうとした蜘蛛の巣が客席の頭上を広がり、後部座席まで張り巡らされて、会場全体が蜘蛛の巣に覆われてしまい、ビックリ！

驚きは後半ますますヒートアップしていきます。観客は荷物をとられたり、水をかけられたり。そして、雪の中を歩くシーンから、一気に強烈な風と紙吹雪が舞台から客席に吹き付けます。客席天井からも大量の雪が降らされ、会場内は真っ白。紙吹雪は半端な量ではなく度肝を抜かれるほどの大吹雪で、大迫力のスノーショーでした。

憶測ですが、過去に日本公演が見送られたのは、このシーンが問題だったのではないかと想像しました。大量の紙吹雪の始末は大変だと思いますし、今回も椅子の脚の全てが養生されていて、たぶん、紙吹雪が稼働座席の隙間に入り込まないように配慮したのではないのでしょうか。

最後にカラフルで大きな風船が、たくさん会場内に飛び交い、みんなで楽しめます。子どもたちは席を離れ、ボールを追いかけ、まさに参加型パフォーマンスでした。

この公演は東京・大阪の2ヶ所で計24公演行われ、いずれも大成功だったそうです。

私が観た回も、子ども連れの親子、仕事帰りの女性グループ、年配のご夫婦と様々な層の観客でいっぱいでした。こうした海外招聘公演のほかにも、近年では日本人パフォーマーのクラウン公演、サーカス公演も数多く行われるようになってきました。今後もどんな作品が生まれ、どんなパフォーマンスが観られるのか楽しみです。

● “EMPIRE” (エンパイア) を観て〔長屋あゆみ〕

7月、幸運なことに声がかかり、東京公演初演を翌日に控えた「エンパイア」(品川プリンスホテル Club eX) のゲネプロ公演を観てきました。こちらのショウは2012年、ニューヨークはタイムズ・スクエアで初演を迎え(ニューヨーク史上初めてブロードウェイにサーカステントを建てたのだとか)、その後オーストラリアでの公演を経て、東京にやってきたとのこと。会場の品川プリンスホテル Club eXでは、2012年・2013年と「ありえないほど近い！」をキャッチコピーに「LE NOIR ルノア〜ダークシルク〜」というサーカスショウを上演してきており、今回のEMPIREもこの「ダークシルク」シリーズの流れなので、毎年恒例のイベントとして根付かせたい主催側の狙いがあるようです。

さて、感想ですが、まず客席からステージまでの距離はキャッチコピーどおり「ありえないほど近く」、大迫力でした。距離もそうですが、直径約4mという狭さのステージ上で繰り広げられるデュオのローラースケートなどの大技の数々に「まさか！」の連続！終始ハラハラドキドキしました。サーカス芸は難易度の高い技が次々と披露され、どれも見応えがありました。日本のテレビ番組に出演し話題となったパフォーマンスも盛り込まれており、「まさかここで観られるとは」とオトクな気分になり、演出側の狙い通りあっさり満足した私なのでした。また、日本人パフォーマー・YASUこと吉川泰昭さんが出演、ジャーマン・ホイールを披露しています。

特筆したいのは、宣伝のやり方です。なんとショウの本番中は写真だけでなく動画も撮影OKなのです。「上演中の写真・動画は撮り放題！」と公式サイトにもパンフレットにも記載があり、「バシバシ撮って、私たちが観たよとSNSで宣伝してね！」と出演者自らステージ上から呼びかけているのです。

写真・映像は基本的にNGというライブ・エンターテイメントの常識を気持のよいほどに打ち破る様は、衝撃的で革新的とすら感じました。いや〜、おばさんくさい言い方ですが、時代というやつなのでしょうねえ。FaceBookやtwitterなどは、アカウントを持っていなくてもネット上で閲覧できます。知人や友人が「楽しかった！」と楽しげな写真をアップしていたら、そりゃ行ってみたいくなりますよね。時代は変わっても効果的な集客手段はやはり「口コミ」。時代は変わって現代的な口コミといえばSNS、なんです

ね。

そういえば、以前某ショウにて、売店で「お気に入りの出演者に終演後直接手渡せるという特権付きの花」2,000円というのを見たことがあります。みなさん色々なことを次々と思いつくものです。私もアイデアを絞り出さなければ。

ということで、サーカス村協会とアフタークラウディカンパニーのFaceBookページを作りました。サーカス学校の様子などお知らせしています。ぜひチェックしてみてくださいね。アカウントを持っている方は「いいね」やコメントなど、応援をお願いいたします。

●国際サーカス村協会 <https://www.facebook.com/circusmura>

●アフタークラウディカンパニー <https://www.facebook.com/accircus>

最新 サーカス公演情報

★木下大サーカス

●神戸公演 公演期間 2014年9月13日(土)～2014年11月30日(日)

●休演日；木曜日と9/17(水)、10/15(水)、11/12(水)

●会場；イオンモール神戸北特設会場 ●電話；神戸公演事務局 TEL078-983-4005

★ポップサーカス

●愛媛公演 公演期間 2014年9月20日(土)～2014年11月16日(日) ●休演日；木曜日

●会場；フジグラン重信 大テント ●電話；松山公演事務局 TEL089-960-1555

★野外民族博物館 『ハンガリー・アメイジング・サーカス』

ヨーロッパが誇る大河ドナウ川が流れるハンガリーより9名のアーティストが来日。空中技を中心とした驚異のサーカスショーを披露します。アーティストたちが演じる旅の一座と共に、エキゾチックなサーカスの世界にご招待します。

※サーカスは入園料のみでご覧いただけます。

●公演期間 2014年9月13日(土)～11月24日(月祝)

●時間；平日 11:30/14:00、土日祝 11:00/13:00/15:00 ●休演日；毎週水曜日

●会場；野外民族博物館リトルワールド野外ホール ●電話；野外民族博物館リトルワールド0568-62-5611

★スペースワールド 『スウィングサーカス』

規格外の大迫力演技にあなたも感動間違いなし！世界を旅する本場のサーカスを“超”間近で体験できるのはこの秋だけ！※サーカスは入園料のみでご覧いただけます。

●公演期間 2014年9月13日(土)～10月19日(日) ●時間；11:00/14:00 ●休演日；毎週水曜日、木曜日

●会場；スペースワールド ビッグバンプラザ ●電話；総合予約センター093-672-3600

その他公演情報

★松村久美 写真展 「コザ・照屋・銀天街」

久しぶりに「おもしろ学校」の企画です。松村久美さんが見つけた沖縄。「戦争・米軍基地の沖縄、美ら海の沖縄」とひと味違う。安倍総理、原発再稼働でいきどおってるあなたも、ちょっとくつろげる写真展ですよ。

●期間；2014年10月28日(火)～11月3日(月) 11:30～23:00(日・月は18:00迄)

松村久美スライドトークショー 11月1日(土) 14:00-16:00 参加費1,000円(ワンドリンク付)

●会場；Space&Café ポレポレ坐 ●お問い合わせ；ポレポレタイムス社 03-3227-1405